



結界の水

渡辺南央子

(茨城)

人生の余白かここは 病室のましろき繭のなかに目覚めつ
突然の腎機能低下 ワクチンの副反応とは言はず言はず

「過労ですね」と告げくる医師の丸眼鏡レッサーパンダのやうな親しさ

こんなこととしていいのかわたくしは 点滴より落つ結界の水

他人ひとに会はず過ぎて二年病室ふたとせを水鳥のごとナースゆきかふ

斎藤史の齢ひならねどヘルペスが弱体化せしわれを襲ひき

貧困児童あまた居る世の過剰なる〈食レポ〉テレビ消す、月の夜

冥き世の底ひの子らに届けたし月の兎の搗くまるき餅

足踏みミシンのおとが聞こえていたらうか瓦礫となりし小さな町に

映像に幼なのなみだ顔よぎり喉に小骨の刺さる心地す

だまされて兵役に赴きしその息子呼び呼びて枯れんその母の声

心中で「逃げて」と叫ぶむなしさに二〇二二年の秋冷しうれいふかむ

折りふしに心理学者がプーチンの心理を測る説淀みけり

国葬を映すテレビを消すゆふべ億光年かけ星光ほしかげとどく

国挙げていちにんの死を悼む夜も戦地に散りぬ千のいのちは

このごろの私

無心になれる家事が好きで、
籠り居をきつかけにあれこれ
精を出していた。ストレスは
消えるが、案外老体に堪えた
らしく急性腎機能不全で入院
する羽目に。暫くは歌三昧の
暮らしに漬かろうと思う。



十津川は秋

森田 治生
(三重)

このごろの私
コロナウィルスの流行で家
籠りが続いたが、少し落ち着
いたのを機に三年ぶりに妻の
弟夫婦、従姉夫婦、私の弟と
奈良に出かけた。大らかな自
然と身内に癒され、来年もと
約束したが叶うだろうか。

うかららと三年待ちし奈良の旅 旅行支援の恩恵を受く

子や孫の末をおもへばいくらかの疚しさのあり旅行支援は

コンビニのひとつだに無き十津川村きもち良いほど信号も無し

奈良、和歌山、三重の境を漂ひぬ和歌山県から小舟に乗りて

「あそこまで水に浸かった」五メートル上の破屋を船頭が指す

荒魂、和魂持つ神霊の荒ぶる魂をまさかに見たり

このたびも秘境好きなる義弟のチョイスで果無集落を訪ふ

コスモスの見頃は過ぎてもみぢ葉がいろ重ねゆく果無集落

吊り橋を渡れるわれと渡れない妻ゐてしんと十津川は秋

この国に動乱のときいくたびかありて吉野は深くかかはる

几帳面なB型なんだ：だれか言ふ明日の旅程を練るわれを見て

あさかげの奈良の大路を闊歩する牡鹿、牝鹿の背は枯れ葉いろ

裁判所の庭に草食む神鹿に三十五万都市はまほろば

いにしへの〈奈良九重桜〉には食害防止の金網巻かる

旅を終へ伊勢と伊豆とに別れたり叶ふや次の出雲への旅